様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)（特設分野研究）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７ＫＴ０１４３

研究課題名（和文）社会的ヘテロフォニーとしての漫才対話～オープンコミュニケーションの超分節性の解明

研究課題名（英文）Manzai dialogues as social heterophony: Toward understanding the suprasegmental features of Open Communication

研究代表者
岡本　雅史（Okamoto, Masashi）

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：３０４２４３１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：研究成果は、(1)漫才対話データ収録、(2)社会的ヘテロフォニーの基盤の解明、(3)多様な相互行為場面との対照による漫才対話の再検討、(4)アウトリーチ活動、に大別される。具体的には、ロボットとプロの漫才師による漫才対話の高品質な音声・映像データを収録し(1)、インタラクションリズムを軸に漫才研究の知見を深化・発展させる(2)と共に、独話形式の演芸や多様な相互行為場面との対照分析を通じて(3)、言語・音声・身振り等様々なモダリティが協調と逸脱を繰り返しつつ一定の秩序をもたらす機序を解明した。さらに、TV番組や公開講座・研修講座を通じて社会発信を行い、公開シンポジウムで研究成果を総括した(4)。

研究成果の学術的意義や社会的意義
主な学術的意義は、従来の相互行為研究に欠けていたコミュニケーションのリズム的側面に光を当てたことにある。特に、多様なモダリティが協調・逸脱を繰り返しながら一つの秩序だった相互行為を構築している様態を解明する本研究の方向性は、今後の相互行為研究にとって大きな示唆に富む。また、収録した人間とロボットによる漫才対話の音声・映像データはタグ付き対話コーパスとして外部公開を目指しており、今後の研究発展に寄与するものである。一方、対話型の情報伝達フォーマットとしての〈オープンコミュニケーション〉の解明は、対面が苦手な児童・生徒に対する効果的な教育手法として期待されており、本課題の社会的意義の中心と言える。

研究成果の概要（英文）：The research outcomes can be broadly categorized into: (1) recording of Manzai dialogue data, (2) unraveling the foundations of social heterophony, (3) reexamining Manzai dialogue through contrasting various interactive contexts, and (4) social outreach.
In (1), high-quality audio and video data of Manzai dialogues were recorded, involving interactions between two robots and professional Manzai performers. In (2)-(3), the study deepened and expanded the understanding of Manzai research by focusing on interactional rhythms. Through comparative analysis with monologue-style performances and diverse interactive contexts, it elucidated the mechanisms through which various modalities such as language, speech, and gestures cooperate and deviate, ultimately establishing a certain order. In (4), the research findings were disseminated through TV programs, public lectures, and training courses, aiming to engage with the wider society. The research outcomes were summarized in a public symposium.

研究分野：コミュニケーション研究

キーワード：オープンコミュニケーション　漫才対話　マルチモーダル分析　インタラクションリズム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

これまでのコミュニケーション研究の多くは二者間の対話場面を分析の起点としてきたが、近年では二者間対話では説明できないコミュニケーション現象をいかに適切に記述・説明するかという関心のもと、三人以上の参与者からなる会話研究として多人数インタラクションの分析が盛んとなってきている[1]。しかし、その多くはグループミーティングやポスター発表会場でのインタラクションなど、発話交替が二者間のみならず複数の参与者がその都度ターンを取りうるような均質な会話空間の分析に留まっていた。それに対し、研究代表者岡本は、従来ボケとツッコミによってユーモアを喚起する伝統的話芸としての語用論的分析が主であった漫才対話について、二者間の内部対話によって外部の聴衆に対して協働的かつ間接的に情報を伝達するという側面を言語・非言語的に分析し、そうした「コミュニケーションを見せるコミュニケーション」という入れ子型のコミュニケーション様式を新たに〈オープンコミュニケーション〉と名付ける先駆的な研究を行った[2]。以降、この〈オープンコミュニケーション〉概念を軸として、ニュース番組の出演者の視線と発言の志向性を操作した心理実験[3]やラジオトークの分析に基づく発話交替と視線の相関分析[4]など、様々な研究が多分野の研究者によって実施され大きな広がりを見せ始めている。

本研究課題は 2007-08 年度に本研究課題の代表者と分担者の一部を中心とした萌芽研究(課題番号 19650045)、そして 2009-11 年度に今回の分担者全員を加えた基盤研究(B)(課題番号 21300045)の発展的継承として提案するものであり、これまでに得られた重要な知見と蓄積したデータを活かしつつ、「オープンコミュニケーションとしての漫才」に新たな光を当てることを企図した。

２．研究の目的

本研究の目的の中心は、漫才対話に代表される〈オープンコミュニケーション〉のマルチモーダルな分析を通じて、音声コミュニケーションが多重の志向性を有しながら一連の流れの中で境界づけられ受容されるための超分節的なコミュニケーション・リズムや調性のはたらきを解明することにある。

ここで謂う〈オープンコミュニケーション〉とは、通常の参与者間で「閉じた」対話やコミュニケーションと異なり、そのコミュニケーションの場から見て外部にある聴衆に向けられる「開かれた」コミュニケーションを指す。また、「リズム」や「調性」というのは本来楽理的な概念であり、「超分節性」とは複数の音素に跨って生じるアクセントやイントネーション等に適用される音調学的概念であるが、ここでは単に発話の音響的な特性として想定されているのではない。そうした音響的なアナロジーを用いることで、発話やジェスチャ句などの従来の構成主義的な分節単位を横断・越境するコミュニケーションの超分節的な特性を明らかにすることを企図している。さらに、漫才対話が対話の形を取りながらも一つの境界付けられたまとまりとして聴衆に受容される様態を〈社会的ヘテロフォニー〉と捉える新しいコミュニケーション分析の視座を提供する。

漫才対話における「調」や「モード」の超分節的な変化は演者間のみならず演者と聴衆との間においても、発話、ジェスチャ、視線、姿勢、プロソディ、笑い、など各表現モダリティの微細な協調と逸脱を繰り返すことによって複雑な様相を呈しつつ、より大局的な相互行為全体の秩序を志向する。まさにこの点が本研究でこの様態を〈社会的ヘテロフォニー〉と名付ける理由である。つまり、オープンコミュニケーションとしての漫才対話は、インドネシアのガムラン音楽のように、複数の奏者や楽器が一つの旋律を志向しながら異なったリズムやテンポで即興的・非協調的に逸脱する音楽様式である「ヘテロフォニー」と非常に共通した構造を有していると考えるからである。

３．研究の方法

本研究の方法としては、主に以下の 3 つを軸に実施した。

（１）漫才対話データの新規収録とアーカイブ化
（２）相互行為場面の言語・非言語マルチモーダル分析
（３）研究成果のアウトリーチ

（１）については、本研究課題の研究代表者・分担者全員が、過去の経験から複数の芸能事務所とのコネクションを有しており、さらに高品質の音声・映像収録手法も確立していた。また、収録会場として、代表者岡本が所属する立命館大学のホールで行うことが容易な研究環境であり、さらに収録協力者として当大学に所属する指導学生たちの十分な人数の確保も可能であった。また、収録データの整備として、アノテーション作業を行う必要があるため、分担者大庭を中心としたアノテーション班を組織した。

（２）に関しては、研究代表者・分担者各々が相互行為のマルチモーダル分析の経験が豊富で

あることから、本研究課題を進める上での主要な分析手法として採用した。具体的に言うと、代表者岡本は認知言語学と語用論を専門としつつ、コミュニケーション研究者として多くの相互行為場面のマルチモーダル分析を実施してきた。また、理論的な研究としても、自身が提唱する〈オープンコミュニケーション〉概念を単に漫才対話の分析に特化したものに留めることなく、さらなる応用・発展可能性を索めて、近年急速に注目されている「仕掛学」[5]の一翼を担った、コミュニケーションの「仕掛け」に関する認知行動モデリング、そして会話空間を支える共有基盤と発話が担う多重の志向性の解明へと研究を進めてきた。一方、分担者阪田は身体性認知科学の観点から、漫才における観客の有無による非言語行動の比較分析やラジオ番組の出演者の習熟度による身振りの違い、さらには中国の話芸である「相声」との比較に基づく発話タイミングの計量的分析、など多くの研究を通じて〈オープンコミュニケーション〉概念の有用性を実証してきている。そして、分担者細馬は本邦における身振り研究の第一人者として、漫才やコントにおけるツッコミ役の身体的な振る舞いの分析を始め、ジェスチャとオノマトペの構造的相互連関、さらには介護場面における微視的な身振り分析など、一貫してことばと身振りの協調現象について研究を行っている。最後に、分担者大庭は漫才において見過ごされがちな観客の振る舞いの分析を通じて、演者と観客という非対称的な成員性を持つ両者のインタラクション中の集合的同調現象の存在を明らかにし、近年では養育者と子供のインタラクションにおける相互調整について研究を行っている。このように全員が多様な相互行為場面の分析を得意としており、漫才対話のマルチモーダル的性質をその近縁の相互行為事例との比較・対照を通じて本研究課題に各自が取り組んだ。

最後に（３）として、本研究を通じて得られた学術的知見を、アカデミアのみならず社会全体に伝えるアウトリーチも意識的に行った。具体的な成果については次節の（４）を参照されたい。

４．研究成果

（１）漫才対話データの新規収録

本研究課題の一つの柱となる新規漫才対話データの収録については、研究代表者と研究分担者全員が中心となって開催したシンポジウム企画において実施した。具体的には、吉本興業および神奈川工科大学の協力のもと、日本認知科学会第 35 回大会（2018）において公開シンポジウムを開催し、ロボット 2 体とプロの漫才師（かまいたち）による同一ネタの実演と解説、およびパネルディスカッションを行い、高品質の音声・映像データを収録することができた。特筆すべきは、厳密な対照分析が可能なように、①ロボット（Pepper）同士の漫才対話データ、②①と同一ネタ（しゃべくり漫才）の漫才師による実演データ、③漫才師による②と異なるネタ（コント）の実演データ、④②のリハーサルデータ、⑤③のリハーサルデータ、⑥漫才師（ツッコミ）とロボット（ボケ）によるリハーサルデータ、⑦漫才師（ボケ）とロボット（ツッコミ）によるリハーサルデータ、⑧①～③における観客の反応データ、の計 8 種類の音声・映像データの収録に成功したことである。研究期間内ではこれら全てのアノテーション付きのアーカイブ化を完成させることは叶わなかったが、今後は研究用のタグ付き音声・映像対話コーパスとして外部公開を行うことを目指している。

（２）社会的ヘテロフォニーの基盤となるインタラクションリズムの解明

本研究課題のもう一つの柱である〈社会的ヘテロフォニー〉については、代表者岡本が新たに提唱する《インタラクションリズム》という新たな鍵概念を元にこれまでの漫才対話分析における知見を深化・発展させることで、日常場面からフィクションに至るまで、言語・音声・身振り等の様々なモダリティが協調と逸脱を繰り返しながら一定の秩序をもたらす機序の解明に全員で取り組んだ。

まず、代表者岡本は、社会言語科学会第 43 回大会（2019）において、既存の漫才映像データの分析から漫才対話の「テンポの良さ」を支える発話リズムの同期・変調パターンについて明らかにし、さらにリモート漫才と対面漫才の比較分析をインタラクションリズムの観点から行い、その分析結果を日本認知科学会第 37 回大会（2020）で指導院生と共同報告した。さらに、その成果を踏まえ、間合い研究会（2021）の招待講演として、対話リズムの修復戦略とリズム解釈の多重性について報告した。次に、日常対話と漫才対話をインタラクションリズムの観点から比較し、両者に共通するリズム維持のメカニズムについて明らかにした。一方、遠隔コミュニケーション環境や TV ドラマといった日常会話場面とは異なるインタラクション環境にも目を向け、発話重複やフィラー等の非流暢性が日常会話とは異なる生起傾向や回避戦略が観察されることを明らかにした。また、漫才対話の音声分析を通じて「対話の一体感リズム」の修復メカニズムの解明にも取り組み、その成果を第 44 回社会言語科学会（2020）で報告した。さらに、音声以外のインタラクションリズムとしては、会話と飲食という異なる活動を調節する「アイドリング」動作に着目し、これが発話の非流暢性と共通の構造を有することを明らかにした。その成果は社会言語科学会第 45 回大会（2021）で共同報告され、その結果、第一発表者である指導学生が研究大会発表賞を受賞することとなった。

一方、分担者阪田は、漫才対話におけるマルチモーダル情報の時系列変化を捉え、漫才師と観客とで創出されるインタラクションリズムの特徴を明らかにするために歴代 M-1 王者の映像分析を行った。また、インタラクションリズムの構築に重要な役割を果たす視聴者が、画面上のどのような仕掛けに共感するのかを確かめるために、視聴者の感情的共感と論理的理解を促進す

る「共感チャネル」の有効性に関する実験研究も行った。両研究の成果は情報処理学会第 83 回全国大会（2021）で共同報告された。

最後に、分担者大庭は、漫才対話におけるインタラクションリズムの指標として用いるため、漫才演者 2 名間の脈動の同期についてデータ分析を進めた。さらに、演者間における脈動の推移と、観客における脈動の推移・変化を観察することにより、漫才中に両者の相互作用がどのように展開されるのかについて動的メカニズムの分析結果をまとめている。

（３）多様な相互行為場面のマルチモーダル分析から見る漫才対話の独自性

本研究課題で中心的に扱われる漫才対話を〈オープンコミュニケーション〉の観点から研究する上で、対話形式ではない独話形式の演芸、ならびに他の様々な相互行為場面との対照分析は不可欠である。

そこで、代表者岡本は、一人の話者の語りが中心となる演芸である落語と漫談に着目し、前者においてマクラから本題へと語りのモードが転換する場面において言語的な境界を示しつつも、非言語的・パラ言語的モダリティの層においてはその境界と時間的に一致しないことを明らかにし、語りの受け手に対する二重の境界設定がプロの噺家の語りの特徴であることを示唆した。一方、後者については、一人語りの中にも仮想的な対話場面の再現が漫談において頻出することを示し、仮想的な語り手を導入する際の引用標識の戦略的な脱落が受け手の物語認知にとって有効な手段であることを明らかにした。いずれも社会言語科学会第 41 回大会（2018）で報告された。さらに、散文テキストの対話変換実験に基づき、仮想的相互行為とオープンコミュニケーションの相互関係の一端を明らかにし、その成果は国際会議 The 15th International Cognitive Linguistics Conference (ICLC-15)（2019）において報告された。

次に、分担者阪田は、観客も漫才対話を支えるコミュニケーションの参与者であると仮定し、観客の存在が、漫才師のパフォーマンスにいかなる影響を与えているかを検討した。プロの漫才師による実証実験を実施し、ボケ、ツッコミという役割によって観客による影響の受け方が異なること、オープンコミュニケーションの参与者として、漫才師と観客が相互参照的な関係にあることを明らかにした。この研究成果は、電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎研究会（2017）、および国際会議 International Conference on Culture and Computing（2017）にて報告された。さらに、オープンコミュニケーションのメタ的な側面にも着目し、「漫才師と場を共有している観客」（映像中）の存在と、「自身と場を共有している観客」（同一空間）の存在が、視聴者の心理・行動に与える影響を確かめる実験を行った。実験の結果、映像中の観客の存在の方が共感チャネル的な機能を強く発揮することが確かめられた。

一方、分担者細馬は、相互行為場面としてのじゃんけんに着目し、発声に伴う身体的身振りが参与者間で相互調整される様態を明らかにし、その成果を国際会議 16th International Pragmatics Conference (IPrA2019)（2019）にて報告した。また、指導学生とともに、お笑い芸人のオンライン・ミーティングにおける同期とオーバーラップの問題も分析している。特に、遠隔コミュニケーションにおいて、送信に伴うレイテンシが発話のタイミングにどのような影響を与えるかを図式化し、芸人同士がこの問題をどう局所的に解決するかを、実際の事例を分析することで明らかにした。その他、細馬はアニメーションや TV ドラマ、ゲーム空間等、多岐にわたる領域におけるマルチモダリティの分析を通じて、仮想的なリアリティがどのように構築・維持されているかを明らかにし、その成果を学術論文のみならず一般読者向けの図書としても多く公刊している。

（４）研究成果のアウトリーチ

本研究課題のアウトリーチの一環として、まず代表者岡本は、これまでの漫才対話研究の成果を市井の人々に伝える機会とするべく、日本笑い学会のオープン講座(2018)で講演を行う一方で、言語処理学会第 28 回年次大会（2022）にて、漫才のボケとツッコミに関する最新の研究動向と本研究課題を遂行する上で得られた知見をチュートリアル講演として報告し、情報工学系の研究者を中心に多くの関心を集めた。さらに、兵庫県姫路市教育委員会の要請に応じ、本研究課題で得られた知見を元に、「コミュニケーションのマルチモダリティ～言語と非言語の相互作用を捉える視点」という演題で姫路市の小中高教員向けの研修講座（2022）を実施することで、本研究課題の教育的効果についてもアウトリーチすることができた。なお、言語的な漫才対話研究のアウトリーチとしては、ツッコミ発話を聞き手行動として捉える論考を『聞き手行動のコミュニケーション学』（2018）の一編として公刊している。

一方、マスコミ関連のアウトリーチ活動としては、分担者細馬が NHK の TV 番組「ろんぶ~ん」（2018）にて、漫才のツッコミ発話に随伴するジェスチャについて紹介するとともに、既出論文では分析していなかった漫才コンビのジェスチャについても新たに分析を行い、多くの視聴者に対して本研究課題に対する興味を喚起した。さらに分担者阪田は、フジテレビの TV 番組「とくダネ！」（2021）において、M-1 グランプリ 2020 の優勝コンビであるマヂカルラブリーのネタが漫才の定義から逸脱するものであるかどうかについて、笑い 1 回あたりの持続時間の時系列分析に基づき、従来の優勝コンビが聴覚情報を基盤とするターンテイキングとして特徴づけられるのに対し、マヂカルラブリーが視覚情報を基盤とするボケという新しい漫才スタイルを提示していることを解説し、多くの好評を得た。

そして、最終年度となる令和 3 年度には、これまでの研究成果全体のアウトリーチとしてオン

ラインで公開シンポジウム（2022）を実施した。全体の趣旨としては、ボケとツッコミという異なる役割の組み合わせから生まれるおかしみ、演者の身振りと発話が織りなすマルチモダリティ、演者と観客の相互作用が支える一体感等の漫才が有する様々な論点について考察することで、従来の言語・非言語研究やコミュニケーション研究に新しい視座を提供することである。本研究課題の代表者・分担者全員が個別報告を行った本シンポジウムは、最終的に 166 名の参加者を得て、フロア全体とも充実した議論を行うことができ、事後アンケートでも本研究課題に対する関心の強さを改めて確認することとなった。

＜引用文献＞

[1] 坊農真弓・高梨克也 (編),『知の科学―多人数インタラクションの分析手法』, 東京: オーム社 (2009).
[2] 岡本雅史・大庭真人・榎本美香・飯田仁, 対話型教示エージェントモデル構築に向けた漫才対話のマルチモーダル分析, 知能と情報, 20(4): 526-539 (2008).
[3] 舟戸貴織・長谷川考治・内藤哲雄・唐沢穣, オープンコミュニケーションにおける会話スタイルの違いが聴衆に及ぼす影響, 日本心理学会第 76 回大会論文集, 1AMB20 (2012).
[4] 清藤弥生・寺岡丈博・榎本美香, オープンコミュニケーションに指向した話者移行適格場の統語構成と視線:ラジオトーク分析を通じて, 電子情報通信学会基礎・境界ソサイエティ/NOLTA ソサイエティ大会講演論文集 2016 年基礎・境界, 258 (2016).
[5] 松村真宏,『仕掛学』, 東京: 東洋経済新報社 (2016).

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計19件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 中矢 明歩・岡本 雅史	４．巻 94
２．論文標題 オンライン会話における発話重複 ―先行発話への阻害に着目して―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 人工知能学会研究会資料 言語・音声理解と対話処理研究会	６．最初と最後の頁 70-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11517/jsaislud.94.0_13	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 村岡 春視・細馬 宏通	４．巻 94
２．論文標題 オンライン会議における発話間のオーバーラップの分析	５．発行年 2022年
３．雑誌名 人工知能学会研究会資料 言語・音声理解と対話処理研究会	６．最初と最後の頁 78-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11517/jsaislud.94.0_14	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 細馬宏通	４．巻 B5(01)
２．論文標題 新コロナ禍における在宅勤務―BBCの在宅インタビューにおける仕事と子育ての相互行為―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 SIG-SLUD	６．最初と最後の頁 54-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 細馬宏通	４．巻 52(9)
２．論文標題 アニメーションはもう少しでしゃべり出す：『東京ゴッドファーザーズ』に表れる声と身体の逸脱	５．発行年 2020年
３．雑誌名 ユリイカ	６．最初と最後の頁 200-215
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中みゆき・細馬宏通	4．巻 B5(03)
2．論文標題 聴取と動作によって生まれるアクションRPGゲーム空間 ： 視覚障害者の空間探索と認知	5．発行年 2021年
3．雑誌名 SIG-SLUD	6．最初と最後の頁 91-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Toshiki Iwabuchi, Masato Ohba, Kenji Ogawa, Toshio Inui	4．巻 55
2．論文標題 Incongruence of grammatical subjects activates brain regions involved in perspective taking in a sentence-sentence verification task	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Journal of Neurolinguistics	6．最初と最後の頁 100893
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.jneuroling.2020.100893	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Risa MURAYA, Noriko SUZUKI, Mamiko SAKATA, Michiya YAMAMOTO	4．巻 11569
2．論文標題 The Creative Power of Collaborative Pairs in Divergent Idea-Generation Task	5．発行年 2019年
3．雑誌名 LNCS	6．最初と最後の頁 330 - 342
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/978-3-030-22660-2_23	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 馬部 未奈実・岡本 雅史	4．巻 118(437)
2．論文標題 生演奏場面における演奏者と観客の相互フィードバック～個々の振る舞いがもたらす集合的影響に着目して～	5．発行年 2019年
3．雑誌名 信学技報	6．最初と最後の頁 13-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Suzuki Noriko, Imashiro Mayuka, Shoda Haruka, Ito Noriko, Sakata Mamiko, Yamamoto Michiya	4．巻 10905
2．論文標題 Effects of Group Size on Performance and Member Satisfaction	5．発行年 2018年
3．雑誌名 LNCS	6．最初と最後の頁 191-199
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/978-3-319-92046-7_17	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 細馬 宏通	4．巻 50(7)
2．論文標題 犬のことば ：『犬ヶ島』の会話	5．発行年 2018年
3．雑誌名 ユリイカ	6．最初と最後の頁 89-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 細馬 宏通	4．巻 50(10)
2．論文標題 読み解く身体 ：『ホーホケキョ となりの山田くん』と『十二世紀のアニメーション』	5．発行年 2018年
3．雑誌名 ユリイカ	6．最初と最後の頁 197-207
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 細馬 宏通	4．巻 50(12)
2．論文標題 ノイズの夢 ：『ハッピーアワー』の音声がもたらすこと	5．発行年 2018年
3．雑誌名 ユリイカ	6．最初と最後の頁 260-267
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉川正人、木本幸憲、岡本雅史、佐治伸郎	4．巻 19(2)
2．論文標題 第38回研究大会ワークショップ 理論研究再考―理論・モデルは社会言語科学にどう貢献するか？―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 社会言語科学	6．最初と最後の頁 87-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19024/jajls.19.2_87	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 淺田千晶、岡本雅史	4．巻 SIG-SLUD-B507
2．論文標題 集合的行為としての拍手を支える時空間構造―漫才鑑賞中の観客行動のマイクロ分析から―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 人工知能学会研究会資料	6．最初と最後の頁 15-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岡本雅史	4．巻 12
2．論文標題 課題達成対話の基盤化を実現する言語・非言語情報の多重指向性	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日本語用論学会第19回大会発表論文集	6．最初と最後の頁 275-278
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 宮田佳寿美、阪田真己子	4．巻 117(177)
2．論文標題 オープンコミュニケーションとしての漫才 ： 観客の存在が漫才の発話タイミングに及ぼす影響	5．発行年 2017年
3．雑誌名 電子情報通信学会技術研究報告	6．最初と最後の頁 61-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Sakata Mamiko	4．巻 -
2．論文標題 Quantification of Multimodal Interactions as Open Communication in Manzai Duo-Comic Acts	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Proceedings of International Conference on Culture and Computing	6．最初と最後の頁 65-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1109/Culture.and.Computing.2017.46	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 正田悠、阪田真己子、Aaron Williamon	4．巻 23(1)
2．論文標題 生演奏による聴取がヴァイオリン演奏の評価に及ぼす影響：全体評定と連続評定	5．発行年 2017年
3．雑誌名 音楽知覚認知研究	6．最初と最後の頁 35-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 細馬宏通	4．巻 1240
2．論文標題 身体コミュニケーションに埋め込まれている「知」 ： 認知症高齢者の食事介助を例に	5．発行年 2017年
3．雑誌名 月刊保団連	6．最初と最後の頁 25-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計31件（うち招待講演　7件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 本井 佑衣・岡本 雅史
2．発表標題 対話のインタラクションリズムの変化とフロアの対称性の関係 ―日常対話と漫才対話の比較から―
3．学会等名 日本認知科学会第38回研究大会
4．発表年 2021年

１．発表者名 伊藤 有梨・岡本 雅史
２．発表標題 ドラマ内相互行為に現れる非流暢性要素の特徴 ―日常会話との比較から―
３．学会等名 社会言語科学会第46回研究大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 岡本 雅史
２．発表標題 ボケとツッコミの言語学～漫才研究が照らす日常会話のメカニズム（チュートリアル講演）
３．学会等名 言語処理学会第28回年次大会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 田中 みゆき・細馬 宏通
２．発表標題 聴取と動作によって生まれるアクション RPG ゲーム空間 ―視覚障害者の空間探索と認知―
３．学会等名 日本認知科学会第38回研究大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 細馬 宏通
２．発表標題 ダストン／ギャリソン『客観性』を読む
３．学会等名 表象文化論学会第15回研究発表集会
４．発表年 2021年

１．発表者名 本井佑衣・岡本雅史
２．発表標題 リモート漫才対話における対話リズムの相互調整 ―インタラクションリズムの「修復」プロセスの解明に向けて―
３．学会等名 日本認知科学会第37回研究大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 岡本雅史
２．発表標題 漫才のテンポからみる対話の間合い ―インタラクションリズムの重層性の解明に向けて―
３．学会等名 日本認知科学会研究分科会「間合い－時空間インタラクション」第18回研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 尾賀円香・赤井里奈・岡本雅史
２．発表標題 「食べる」と「飲む」を伴う会話場面の身振り分析 ―会話と飲食を調節する〈アイドリング〉動作に着目して―
３．学会等名 社会言語科学会第45回研究大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 宮城夏帆・阪田真己子・原尚幸
２．発表標題 漫才対話におけるマルチモーダル情報の動的構造分析
３．学会等名 情報処理学会第83回全国大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 佐治真理恵・阪田真己子
２．発表標題 共感チャネルのマルチモーダル性が映像評価と心理状態に与える影響
３．学会等名 情報処理学会第83回全国大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Masashi Okamoto
２．発表標題 Fictive interaction in prose text: An experiment on prose-to-dialogue conversion
３．学会等名 The 15th International Cognitive Linguistics Conference (ICLC-15)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 本井佑衣・岡本雅史
２．発表標題 「対話の一体感」をもたらす音声インタラクションの時間的特徴―ロボットと人の漫才対話データの分析から―
３．学会等名 社会言語科学会第44回研究大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 岡本雅史
２．発表標題 VNVとは何か？～言語・非言語コミュニケーション研究を拓く15年の歩み
３．学会等名 電子情報通信学会 言語理解とコミュニケーション研究会（NLC）2020年2月研究会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Hiromichi Hosoma
２．発表標題 Multimodal interaction in Japanese Rock, Paper, Scissors: how do we synchronize body movements with utterances?
３．学会等名 16th International Pragmatics Conference（IPrA2019）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 岡本 雅史
２．発表標題 漫才対話研究は会話コミュニケーションの何を明らかにするのか？
３．学会等名 第13回ヴァーバル・ノンヴァーバル・コミュニケーション研究会（VNV）年次大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 本井 佑衣・岡本 雅史
２．発表標題 漫才対話の「テンポの良さ」を支える発話リズムの同期・変調パターン
３．学会等名 社会言語科学会第43回研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 勝代 健太・阪田 真己子
２．発表標題 ジェスチャーの同期とその志向要因―人はなぜジェスチャーを合わせるのか
３．学会等名 2019年電子情報通信学会総合大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 細馬 宏通
２．発表標題 動作、発声、発話は共同作業にどのような間合いをもたらすか？
３．学会等名 間合い―時空間インタラクション第13回研究会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 細馬 宏通・城 綾実
２．発表標題 ELANを用いた発話・動作コレクションの作成と質的分析：オノマトペに随伴する動作研究
３．学会等名 言語・音声理解と対話処理研究会第83回研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 細馬 宏通
２．発表標題 発話・身体動作の時間構造を記述する：コレクションに基づく質的分析の可能性（シンポジウム企画）
３．学会等名 日本質的心理学会大会第15回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 細馬 宏通
２．発表標題 音の相互行為を捉え直す：神戸「音遊びの会」の演奏を手がかりに
３．学会等名 ミュージッキング研究会（国立民族学博物館）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 岡本雅史
２．発表標題 漫才を科学する―コミュニケーションメディアとして見る漫才分析の可能性
３．学会等名 日本認知科学会「学習と対話」研究分科会第53回研究会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 岡本雅史
２．発表標題 テキストの対話変換実験に基づくナラティブの共話可能性の検討
３．学会等名 第20回日本語用論学会年次大会ワークショップ
４．発表年 2017年

１．発表者名 矢島のは菜、岡本雅史
２．発表標題 落語におけるマクラから本題への遷移ストラテジー
３．学会等名 社会言語科学会第41回研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 岡本雅史、津田明日香
２．発表標題 漫談における仮想的対話の導入―独話の相互行為性の解明に向けて―
３．学会等名 社会言語科学会第41回研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 正田悠、鈴木紀子、阪田真己子、伊坂忠夫
２．発表標題 ドラムによる多人数インタラクションが参与者の生理反応に及ぼす影響
３．学会等名 日本認知科学会第34回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 村谷理沙、阪田真己子
２．発表標題 創造性課題における協働性の効果について
３．学会等名 情報処理学会第80回全国大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 細馬宏通
２．発表標題 じゃんけんの同期はいかに即興的に達成されるか
３．学会等名 日本認知科学会第34回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 細馬宏通
２．発表標題 共同作業における指揮者の掛け声と身体動作―野沢温泉村道祖神祭りの里引きの事例から―
３．学会等名 日本認知科学会第34回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 細馬宏通、高城ゆり
２．発表標題 ジャニーズジュニア・ファンのオタ会における映像を介した相互行為
３．学会等名 人工知能学会第82回言語・音声理解と対話処理研究会（SLUD）
４．発表年 2018年

１．発表者名 小笠拡子、岡本雅史
２．発表標題 外食場面における外部割り込みからの話題再開ストラテジー
３．学会等名 社会言語科学会第43回研究大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計10件

１．著者名 中丸禎子、加藤敦子、田中琢三、兼岡理恵(編著)／井上征剛、大谷泰三、佐藤宗子、鈴木彰、千葉香織、中野貴文、縄田雄二、西岡亜紀、細馬宏通(著)	４．発行年 2020年
２．出版社 三弥井書店	５．総ページ数 349
３．書名 高畑勲をよむ ： 文学とアニメーションの過去、現在、未来	

１．著者名 永田靖(編著)／アンドリュー・エグリントン、エグリントンみか、須川渡、細馬宏通、福島祥行、古後奈緒子、橋爪節也、小林昌廣、コディ・ポールトン、加藤瑞穂、家成俊勝、酒井隆史、若一光司、林慎一郎、五島朋子、塚原悠也(著)	４．発行年 2020年
２．出版社 大阪大学出版会	５．総ページ数 484
３．書名 漂流の演劇 ―維新派のパースペクティブ	

１．著者名 細馬宏通	４．発行年 2020年
２．出版社 河出書房新社	５．総ページ数 392
３．書名 いだてん噺	

１．著者名 細馬宏通	４．発行年 2021年
２．出版社 ぴあ	５．総ページ数 420
３．書名 うたのしくみ 増補完全版	

１．著者名 辻 幸夫、楠見 孝、菅井 三実、野村 益寛、堀江 薫、吉村 公宏（編）	４．発行年 2019年
２．出版社 朝倉書店	５．総ページ数 864
３．書名 認知言語学大事典	

１．著者名 村上 征勝、金 明哲、小木曽 智信、中園 聡、矢野 桂司、赤間 亮、阪田 真己子、宝珍 輝尚、芳沢 光雄、渡辺 美智子、足立 浩平（編）	４．発行年 2019年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 850
３．書名 文化情報学事典	

１．著者名 細馬 宏通、菊地 浩平（編）	４．発行年 2019年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 288
３．書名 ELAN入門	

１．著者名 遠藤保子、弓削田綾乃、高橋京子、瀬戸邦弘、相原進（編）	４．発行年 2020年
２．出版社 大修館書店	５．総ページ数 208
３．書名 映像で学ぶ舞踊学	

１．著者名 田中 克己(編著)、黒橋 禎夫(編著)、岡本 雅史、木村 博之、山本 岳洋、颯々野 学、小山田 耕二、今泉 容子、林 正樹、楠見 孝	４．発行年 2018年
２．出版社 共立出版	５．総ページ数 256
３．書名 情報デザイン	

１．著者名 村田 和代(編著)、難波 彩子、植野 貴志子、山口 征孝、岡本 雅史、増田 将伸、横森 大輔、森本 郁代、片岡 邦好、井出 里咲子、ブッシュネル・ケード、釜田 友里江、首藤 佐智子	４．発行年 2018年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 336
３．書名 聞き手行動のコミュニケーション学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	阪田　真己子 (Sakata Mamiko) (10352551)	同志社大学・文化情報学部・教授 (34310)	
研究分担者	細馬　宏通 (Hosoma Hiromichi) (90275181)	早稲田大学・文学学術院・教授 (32689)	
研究分担者	大庭　真人 (Ohba Masato) (20386775)	慶應義塾大学・政策・メディア研究科・研究員 (32612)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関